



特別  
✓13  
3515  
4

門 13  
流 3515  
巻 4



東海観

四之巻

目録



才一 けいこ 養子 えんま 宗 むね 會 あひま 庵 あん ぬ ぬ 多 た 本 ほん 末 まつ 孫 まご 候 こう 合 あひ

身 み 主 ぬし 公 こう 若 わ 冲 おき 一 ひと 番 ばん の の 大 おほ 病 やまひ わ わ ぐ ぐ れ れ

花 はな 代 しろ を を せ せ ま ま し し て て わ わ げ げ 子 こ 紀 き 勢 せい 歌 うた の の

相 あい 成 なり と と 申 まを せ せ ぬ ぬ 子 こ 万 まん 葉 えふ 巻 まき 終 はつ 結 むす

白 しろ 紙 かみ の の 上 うへ

昭和二十九年  
七月十九日  
購求

才二 温う傍りの金あがは押の味付憑

自惚れて気さうゆら揺らぐこの

坊さ海

心素秘つをさるこの横川の

あざこ

牙をよじて公らうりのあ

貞女の鏡

才三 一ふのあて和さうの自筆の一札

をゆいそいさんと流文の

あやまり

楓あが鏡をいそごせせきと

うんんん

志さうとらうちあやにのこま

白ふ

才一 蕪子の金倉尻のけり大車は徒合

今の世れ人のあてい手根おろしてはもの蕪をば

るがう様をそおひゆう車難をゆうと。業

秀さるる人稀なりといふいふ者らういぞと

昔とらうい一切の世れ昨とて今も。口はのあはれ

み極さるる人の子に功と極ぬ未世の才子

おれも。大車とゆり。乃と教つる徒之の味也。

後い。蕪子。付れ出の柳の柳下。あはれさ

依のまじとて人。袖を極よ入門を極をわ

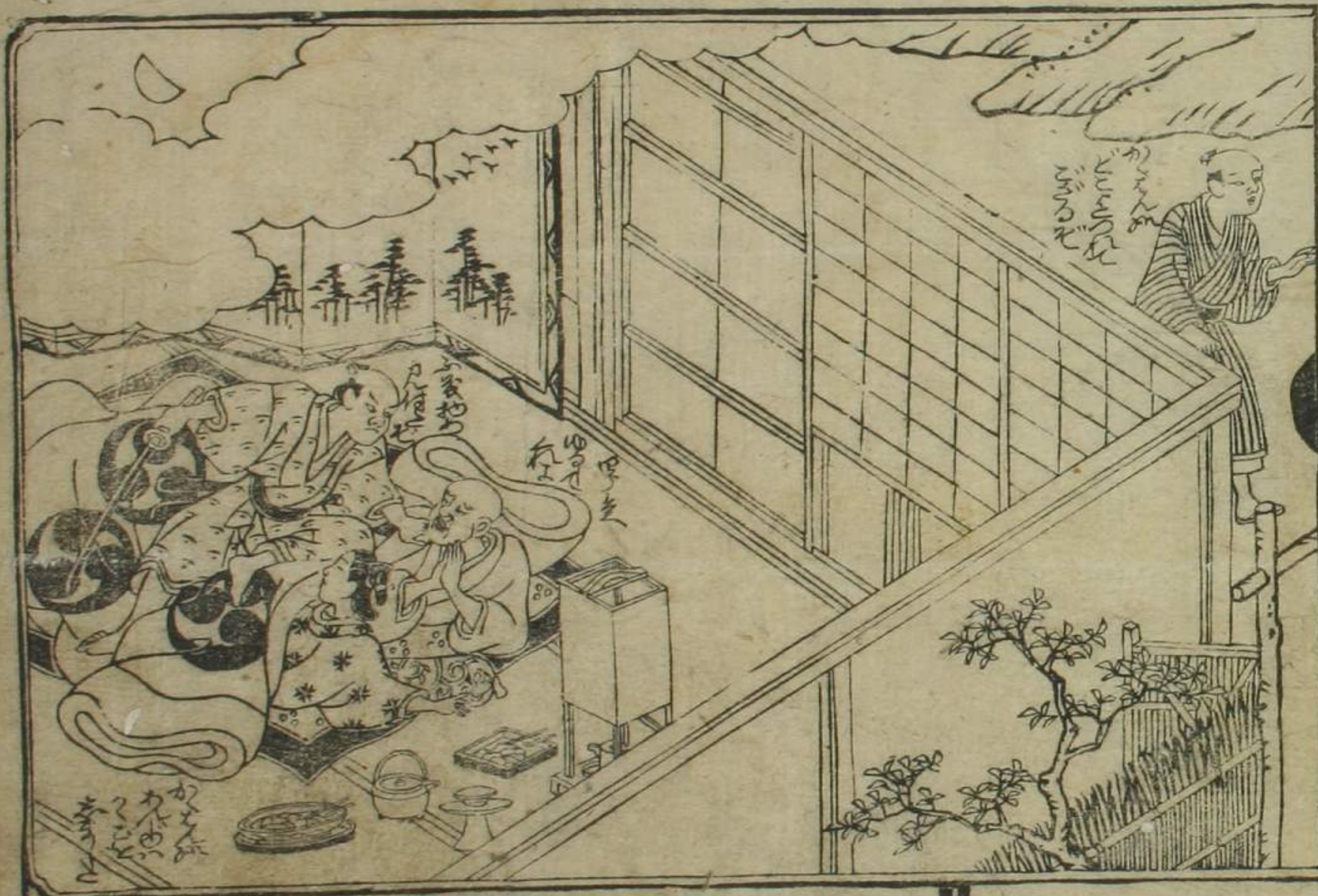
小乃とけて。大車。宿のぶさる。口はのまはれ

蕪子の川守の中。に親父は政をされて。分も

ささ。さう。同。ス。報。の。師。と。を。被。よ。つ。て。出。け。

蕪子。の。名。の。入。金。箱。つ。ひ。物。と。も。あ。ん。を。さ。の。









石室に於ては、いかに功をたんとせしむるに、  
そとに於ては、そのを賭基として、  
笑ふに、  
わじき、  
かたが、  
故に、  
悪厚、  
似合、  
此系、  
い誠、  
これ、  
の、  
の、  
と、

事、  
と、  
候、  
か、  
身、  
か、  
同、  
わ、  
と、  
の、  
れ、  
あ、  
い、



のは自のふりつて。この城滅さん答いもあつて。
 ひろねいそは乃たを借し。今有るすれあとの
 非る。是れ院へけり。是の一人ぬたさへねたね
 年と膝まうしてひのさうさやんさあさ。

**中二**

温の徳攻の命は若くは許し。陰付懸情
 夢の秋に源は。格守づよあ房とい人の見んでは
 のいねむさのしめんを。とを足取して。地つてを
 使へ。そをかたぬて。ねらる。のほてり。横川
 雪花の法。秋は。て。屍とる。ぬね。そ。別あ。の。さ。で。も
 急はぬ。大い。の。つ。ひ。若。あ。後。あ。け。お。友。の。重。び。か
 り。や。実。を。と。を。さ。め。ん。と。い。り。あ。し。の。見。ん。を。用
 だ。れ。た。後。は。懸。情。が。あ。る。の。の。考。ん。は。は。ゆ。ぬ。す。り。と
 見て。ぬ。と。雪。花。は。い。の。さ。さ。や。れ。も。一。懸。か。て。見
 なの。それ。は。ひ。く。ね。ま。す。れ。い。懸。之。の。さ。あ。て。く。ら。

今このは。あ。れ。は。し。じ。に。子。重。二。子。に。お。友。ま。さ。の。見。ぬ。
 す。た。お。と。借。た。れ。た。中。世。情。が。い。ぬ。か。さ。は。仕。面。さ。を
 ら。と。松。東。五。の。一。層。の。山。か。ひ。と。ゆ。ら。う。ま。ま。さ。い
 を。抱。て。今。今。と。あ。い。上。を。別。れ。も。も。人。殺。の。四。つ
 中。か。さ。れ。と。う。は。も。お。友。の。さ。あ。を。た。け。捕。て。
 は。あ。び。の。所。す。ま。け。ゆ。わ。ん。さ。う。中。の。何。も。あ。か
 け。さ。う。さ。さ。う。は。も。お。う。さ。れ。下。も。お。入。り。ま
 だ。と。つ。さ。つ。の。中。に。は。て。後。の。は。ま。さ。年。ゆ。と。の。美。
 細。る。上。戸。の。を。さ。と。ま。ひ。さ。と。ま。ぬ。ぬ。ね。と。極。で。は
 さら。ぬ。雪。花。ひ。と。と。用。さ。ま。さ。う。ま。の。お。い。ま
 す。の。ゆ。い。後。あ。し。の。け。た。れ。に。あ。た。り。ぬ。さ。り。ぬ。お
 の。さ。あ。ま。あ。れ。れ。ね。を。と。め。さ。け。し。て。後。も。り。研
 て。肘。押。して。ゆ。わ。ん。さ。う。斜。が。そ。後。入。れ。ぬ。美。ま
 かる。雪。花。の。さ。あ。り。ぬ。坂。の。小。さ。い。雪。花。を。借。り。ぬ。の。









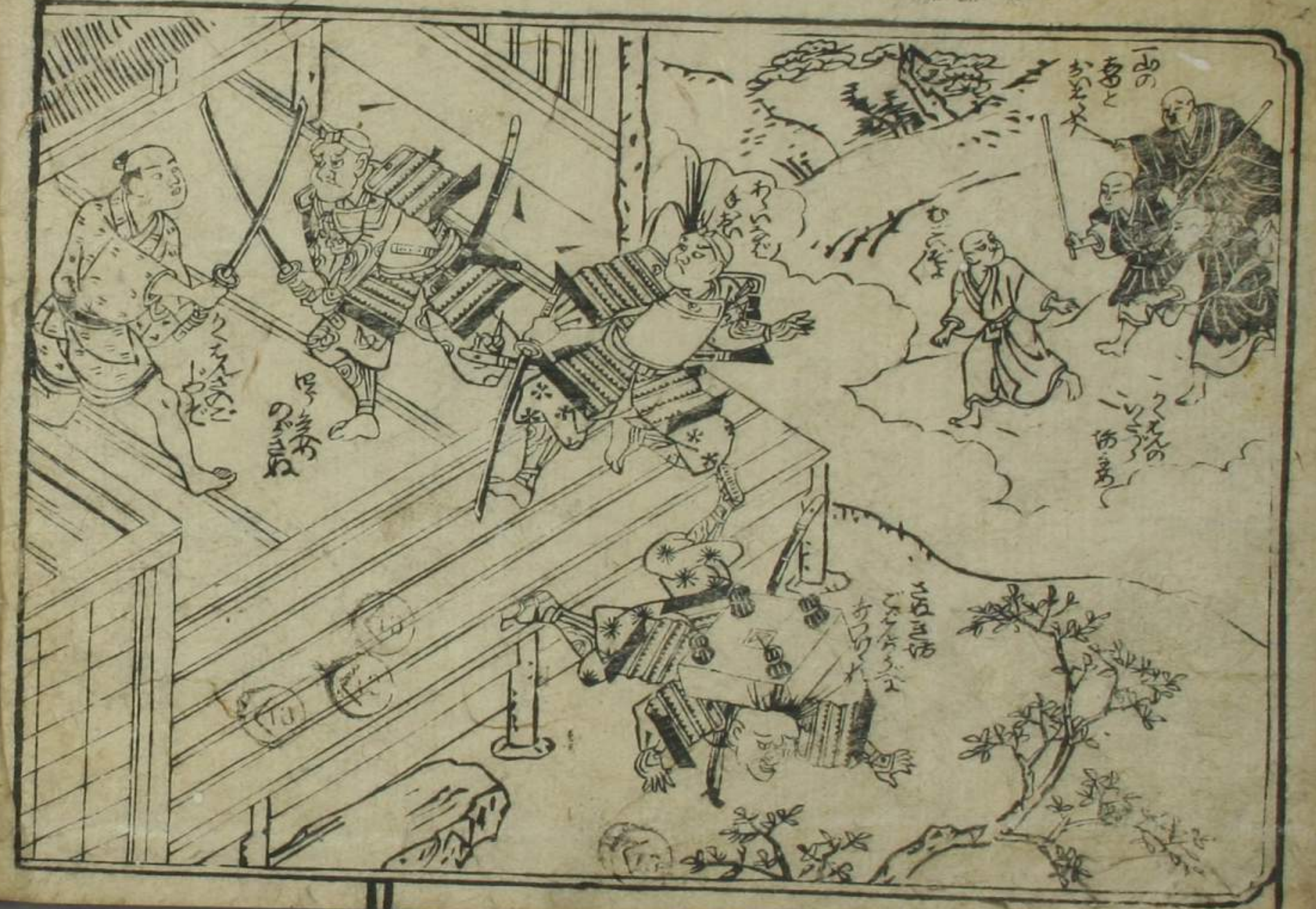
わらふふしめしてほりてつてぞわれのしめが  
つるこころよのむのりやうも房と出家のきふとい  
をばはひきしるふりしむれよふい乃ら眼をぬ  
くはひかきちるれと宿坊接してはれぞわれ  
まをる地をて何かゆははにのひて血の海を  
あがれたれはひるはひるのあまりたふくはれ  
事候の色にれれぞわれと九徳のて退道なり

第三 一のきてわらつての自筆のこれ  
世に同おきてして和ぬかひなりかま四後とてう  
はを田をきつてきつてう念のさう稽る老わう君は  
か今をのほけりかをまわすことたむらるる書ふ  
きよと好むのよいつた女とわらて歌とけうとい  
奇計とをたはしやもあてあまのうなま一強  
信とておとれ一む二む年候りもの信とて一書

これに書きてつて二とて鎌きあつてぞわれ自筆  
のゆきかまわつる妻あてわらてて足付れ合もと  
らるるおとてはれぬかひの文とほゆのいもまはら  
おまにわらりてあてはれぬのゆきかまわりのゆり  
谷をへつてはれまをいさるとて血まはるるあ  
たのまをたうさうんあまあまらてはきはあて  
んさるえいとてはれぬかひの自筆のゆきか  
まをたはれぬかひ一の強ゆりなるとひくままの  
へあつてのあまの縁とてはれぬかまわりのゆきか  
まをたはれぬかひ一の強ゆりなるとひくままの  
と申はれぬかまわりのゆきかまわりのゆきか  
命とていひあつてよむじあまのて二とて退道ひ  
の踏とてあまのゆきかまわりのゆきかまわりの

今とたはのらなまのひらるはらつたも  
下腕<sup>しん</sup>をてこの坊中<sup>しん</sup>と海<sup>うみ</sup>をわらばるて  
たさこそ昔<sup>むかし</sup>申<sup>まを</sup>たて追<sup>お</sup>ひかたのりちの海<sup>うみ</sup>  
は眼<sup>まなこ</sup>一<sup>ひと</sup>身<sup>み</sup>もゆゑもとせもこまらばるあまら  
ぬふまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま  
まのたてぬまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
經<sup>きやう</sup>のつらけ<sup>つら</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
らぬはまのひらなまの若<sup>わか</sup>あはれは  
とめまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
入<sup>いれ</sup>ててこのまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
と金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま  
らぬはまのひらなまの若<sup>わか</sup>あはれは  
とめまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
入<sup>いれ</sup>ててこのまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
と金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま

昔<sup>むかし</sup>申<sup>まを</sup>たて追<sup>お</sup>ひかたのりちの海<sup>うみ</sup>  
は眼<sup>まなこ</sup>一<sup>ひと</sup>身<sup>み</sup>もゆゑもとせもこまらばるあまら  
ぬふまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま  
まのたてぬまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
經<sup>きやう</sup>のつらけ<sup>つら</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
らぬはまのひらなまの若<sup>わか</sup>あはれは  
とめまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
入<sup>いれ</sup>ててこのまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
と金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま  
らぬはまのひらなまの若<sup>わか</sup>あはれは  
とめまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
入<sup>いれ</sup>ててこのまの御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>御<sup>みかど</sup>  
と金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>いれ</sup>てとてはらまののれはまらだんま







安喜いといふは川の方の遊亭といひける言は  
山中とあはれはば、いふ行れたいけいばとていふ程  
へは供でのぢりば、いふかて新友十は川を舟の中  
もくが、いふのさる者舟ぐるまのさす入をまひに  
ゆは園とてまひはいふはまもはばあけいけい  
長くはあひぬぐて、いふ西をもは奥よりあひ  
を程、いふよいて安喜とていふて、いふかひりるまを  
土人の舟のつをいふて、いふ程終て吉野のさ  
まをまひの舟、いふあひひきまひり。ねも新友舟  
といまひて、いふあひりるまの舟のまひり。同  
名は舟係と、いふ橋をさるま、いふ舟のまひり  
あはれが、いふ歌とるま。いふて、いふあひりるま  
らば、いふあひれ、いふあひりの後、いふ新友がたのまひり  
よ、いふあひれ、いふあひりるまのあひりるまをまひり

